わたしたちのゼミへようこそ

文学部

吉野 朋美ゼミ

Welcome to our Seminar!

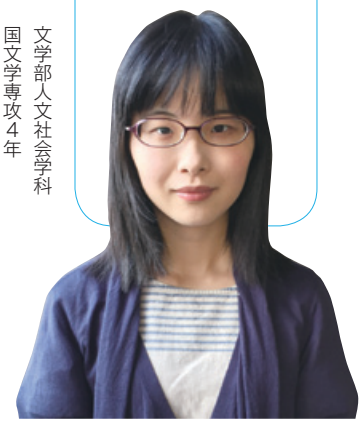
Vol.11

私たち吉野ゼミ、通称・中世ゼミは、主に鎌倉時代周辺から江戸時代の前までの、中世と呼ばれる時代に成立した日本の文学を対象に研究しています。中世と一口に言っても、中世は400年あり、説話や和歌はもちろん、歌謡や能なども含まれます。そのため、毎年多様な卒論が生み出されています。授業のほか、百人一首大会やゼミ旅行などを通じて、中世という時代に迫っていきます。

吉野先生（中央）とともに中世文学を研究するゼミ生

乱世における文学を通して人を学ぶ

文学部人文社会学科
国文学専攻4年
東京都立国立高校出身
塩野（しおの） 彩子（あやこ）



人からの刺激を受け、支えられる2年間

3年次のゼミでは、指定された教材から自分で選んだ説話や歌について自分なりに文学的に考察して発表します。発表の際、傍聴者はくじで決められたグループで討議し、全体に発信することで、発表箇所についてより踏み込んだ理解をめざします。発表を深めるためには多角的な視点をもつことが重要であり、それは、今までどれだけ古典に親しみ、調査方法やアプローチの仕方をいかに多く知っているかにかかってきます。そういう意味では、先輩や先生の指摘によって己の力不足をひしひしと感じるアカデミックな1年でもあったと思います。

4年次の卒論執筆においては、自分の興味があることについて1年かけて書き上げていきます。卒論というと個人作業と思われがちですが、進捗報告の際に、ゼミ全体から出た意見や疑問

2017年2月に実施したゼミ旅行では広島方面へ行きました。ゼミ旅行では、事前に旅行先と中世の関係を調べてしおりを作って臨みます。満潮を迎えた夜、神々しくライトアップされた厳島神社の大鳥居を船でくぐったことが、強く印象に残っています。寒かったですが、1年間一緒にがんばった仲間たちとのよい思い出になりました。

指導教員からゼミ生たちへ Message

日々をちょっぴり楽しく豊かに

文学部教授　吉野（よしの） 朋美（ともみ）

対象を読み解く鍵

おそらく皆さんは、中世の何らかの作品や人物、事物に興味や関心があって中世ゼミを選んだのでしょう。自由に想像の翼を広げ、興味のおもむくまま作品を読み、考えるのは楽しいですよね。でも、恣意的に対象をとらえても、その世界の本質、本当のおもしろさはわかりません。

ゼミは、対象をきちんと読み解くための鍵を、皆さんにお渡しするところです。背景となる人間関係、時代状況や社会・思想に照らして考えること。作品全体を俯瞰する目をもつこと。本文そのもの、用いられる言葉や些細な事柄をゆるがせにせず、丹念に調査し考えること。発表し、ゼミでの質疑を通して新たな切り口や発想を知り、多面的に対象を見る姿勢を養うこと。こうした作業を通して知識を深め、自らの考えを深めるスキルを磨き、卒業論文を書き上げたところで、皆さんはこの鍵を手に入れるのです。

大きな鍵、小さな鍵、少しとんがった鍵……人によって多少違うであろうこの鍵、実は皆さんが社会に出て直面する諸問題を「読み解く」鍵としても使えます。ただ、私としてはやはり、親しんだ中世文学をはじめとする日本文学、あるいは歴史や文化の世界を読み解くのにも、その鍵を使ってほしいと思います。きっと、その鍵は皆さんを仕事や日常の些事から解放し、日々をちょっぴり楽しく豊かなものへと導いてくれるに違いないでしょう。

点から卒論を書くヒントを得ることも多く、チームプレー的な側面もあります。2年間を通して温かい環境で学習し、集大成に臨めることがこのゼミのいいところだと思います。

たかが文学、されど文学……

「結局文学から何を学んでいるのか」と聞かれることは意外と多いです。中世という時代は政権が安定せず、戦が泥沼化していたため、決して華やかで過ごしやすい時代ではありませんでした。そのような極限状況で当時の人々はどう生きたのか、あるいはどのような価値観をもっていたのかを、文学は如実に語ります。そして、それらは私たちの価値観や感受性に影響を与え、ときに大きく感情を揺さぶってきます。そういう意味では私たちが授業でしていることとは、文学を通して過去と現在という複数の時間軸にいる人たちと対話をしているとも言えるでしょう。過去と現在という数多くの人との対話から得られるものは、人間としての深みという目に見えないものであり、生涯を支え続ける基盤となるものでもあります。文学は娯楽とも言えるからこそ、先のように言われることが多いのかもしれませんが、その価値は文学を学術的に本気で学んだ人にしかわからず、また、その答え方に正解がないと私は思います。そうなると、正解がないがために先の疑問がいつまでも問われ続けるという、不毛な繰り返しが起きているようにも感じます。しかし、正解がないことが文学の世界で許されているからこそ討議が可能であり、今まで述べてきたような対話を通した感性の構築ができるのではないかと思います。

正解がないからこそ討議は白熱